

## 第 33 回 沖縄戦跡基地めぐりに参加して

2016 年 3 月 29 日～31 日

### 【39 歳女性】

初めての沖縄。小学 3 年生（9 歳）の息子と 2 人で親子コースに参加しました。沖縄に到着し、参加者全員（約 260 人）が会場に集まったところで、お聞きした対馬丸事件の体験者、平良啓子(たいらけいこ)さんのお話は想像以上でした。

沖縄から長崎への住民の疎開輸送中に、アメリカの潜水艦の攻撃で沈没し、乗船者約 1800 人（783 人の学童を含む）のうち、およそ 1500 人が犠牲になった対馬丸事件。生き残った学童はわずか 59 人だったそうです。そのうちの一人である平良さんは、当時まだ 9 歳で、何人もの人が亡くなっていくのを目の当たりにしました。そしてなんとか救助され家に戻った後も、警察や憲兵から「撃沈の事実は決して語ってはいけない」という「箝口令（かんこうれい）」がしかれていたことで、他の対馬丸の乗船者が帰ってこないし、手紙もないことを心配した人から「〇〇ちゃんのこと知らない？」と、聞かれても何も答えることができなかったそうです。一緒に乗った友達や家族など失い悲しみの中、周りの人に何も言えず、一人で背負い苦しんだ心を思うと、胸が締め付けられるようでした。また、偶然にも私の息子と同い年。体験をお聞きしながら、「もし息子だったら・・・」と重なり、本当にやりきれない思いになりました。

アメリカ軍が沖縄に上陸し侵攻が進むと、ガマ（洞窟）に隠れていた日本兵が、幼い子供が泣くとアメリカ軍に見つかるという理由で殺害したという悲劇がたくさん起こったことを、メッセージ・シンガーの会沢芽美（あいざわめみ）さんが、一人芝居で教えてくださいました。泣き叫ぶ子供を殺すよう日本兵に追い詰められていく、そして、ついに母親が幼いわが子を手に掛けてしまった。という内容で、沖縄の人たちはアメリカ兵だけでなく、守ってくれるはずだった日本の兵隊からも逃げなければならなかったことを初めて知りました。追いつめられた末に出る行動。人を追いつめてしまうとどのようなことになるのか、その怖さを痛感しました。

ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館、南風原文化センターでは、中学生、師範学校生まで戦争に駆り出されるようになり、どのように働きその後どうなったのかを知りました。

特に印象に残ったのが、ひめゆり学徒隊 239 人（13～19 歳の女子学生）が、戦場から次々に運ばれてくる負傷兵の看護をしていた、沖縄陸軍病院の南風原壕（はえぼるごう）です。暗い壕（洞窟）の中で二段ベッドに負傷兵が寝かされているところが再現（南風原文化センター）されていました。次に、実際に使われていた 20 号壕も見学しましたが、再現のものよりも、もっと狭く真っ暗で、さらにとてもジメジメした洞窟で、私の息子は、入口から中をのぞいただけで怖がって中には入りませんでした。

当時は、この中で負傷兵のうめき声と血や糞尿のにおいがひどかったそうです。そのような環境で女子学生が、包帯の交換、食事、排泄物の世話、死体の埋葬等をしていたことを思うと息がつまりそうでした。そして、さらに戦況が悪化し、ひめゆり学徒隊にも解散命令が

出ましたが、激しい砲撃で、逃げる場所もない絶望的な状況で、この後もっと多くの生徒や教員が亡くなったことを知りました。

沖縄戦は本土決戦のための時間稼ぎが目的の戦争だったそうです。時間稼ぎのために、ひめゆりの学生達も含め、沖縄にいる多く人が酷い状況に追い込まれ、たくさんの方が犠牲になったと思うと、いたたまれない気持ちでいっぱいになりました。

沖縄戦跡・基地めぐりの特に親子コースでは、沖縄の音楽や踊り、首里城見学など沖縄の文化に触れたり、海を見ながら芝生のきれいな公園での昼食、海岸でたくさんのサンゴのかけらや貝殻拾いなど、沖縄のきれいな所、豊かで楽しい面も体験させてもらいました。このことは子供にとってとてもよかったと思います。「こんなにいいところでもう戦争はしてほしくない。基地も出て行ってほしい」と、帰宅後言っていました。

戦争の現実を知らないまま大人になってほしくないとの思いから、子供と一緒に参加しました。インターネットなどで簡単に情報を得られる時代ですが、実際に沖縄に行き、沖縄戦を体験された方のお話や、使用された場所を見て、また、本物の沖縄の海や自然、音楽などの文化に触れたことで、遠くの他人事ではなく自分のこととして受け止められたと思います。

親子での参加はとても貴重で有意義なものとなりました。  
ありがとうございました。

## 【9歳男の子】

つしま丸に子どもが775人も乗っていたのに59人しか生きのこらなくてびっくりした。ぼくと同じ9さいだし、もし自分がつしま丸に乗っていたらと考えるととてもこわいと思いました。理由は生きのこったとしても、まわりの友だちはほとんどがしんんでいるからです。

おきなわのおどりははく力があって、がっきはさんしんとたいこなどいろいろあったのでとてもたのしめました。

ひめゆりのとうは、高校生などはたちみまんの女の子たちがごはんをはこんだり、かんごふさんとして、どれいのようにされていてかわいそうだと思います。もし自分がどれいのようにせんそうに行かされていたら、いやだと思うのに、この子たちはせんそうを教えてもらっていなかったから、みんなのやくにたつと思ってせんそうに行ったのがかわいそうだと思います。

おきなわの海はきれいで貝がらもいっぱいあってきれいでした。けどおきなわにきちがあり、しかもこのきれいな海をうめたてようとしているのを知ってうめたてをしないでほしいと思いました。

ぼくはおきなわのことをいろいろ見ておきなわは、緑があふれていて海もき

れいだから、ここでせんそうをしないでほしいと思いました。

そしてこれからはおきなわだけじゃなくせかいぜんたいがせんそうをしないでほしいと思いました。

### 【71歳女性】

今回、基地めぐりに参加したのは実際に自分の目で沖縄の現状を見たいという思いからです。新聞やテレビで目にしている事も沖縄との温度差がどのくらいあるものかという事もありました。

世界一危険と言われている普天間の位置関係も肌でしっかり実感する事ができました。東村高江のテント村、辺野古のテント村も訪れ何故この素晴らしい自然豊かな場所に基地を作りたいと思っているのか米国の意図もはっきり解りました。

2日間ご一緒頂いたガイドの山内さんのお話は本当に分かり易く多岐に渡る説明をしていただき自分たちがあまりにも真実を知っていない事を思い知らされました。

今も昔も変わらずどれほどの沖縄の人たちに苦しみ、悲しみを押し付けてきたか。沖縄問題は沖縄の人の問題だけでなく私達一人一人の問題であるということ胸に深く刻んできました。

今回学んだことを一言でも二言でも伝えていけたらと思います。京都生協の組合員さんの参加が少なくて残念でした。

今回は春休みという事もあり親子での参加がとても多かったように感じます。親子で平和の学習をする、生協らしい取り組みでこれからも息長く続けて欲しいと思いました。

日生協のみなさん、沖縄生協のみなさん楽しい交流集会も計画していただき本当にありがとうございました。

厳しい現実の中でもほっとしたひとときでした。

### 【72歳男性】

今回の戦跡・基地巡りは時間の制約がある中、各地で聴いた現状と行動すべきこと、差し迫った課題等々は現場に来てみなければわからないものばかりであった。来て見るのと見ないと後日の意識が違ってくる感じた。

バス中でのガイドさんのお話を聞いて、沖縄の戦前戦後の歴史から現在までの繋がりや嘉手納、普天間、辺野古、高江と繋がり米国の戦略が深く浸透しているかを感じた。

米国は半永久的に沖縄を支配する勉強もしてきているという事を聞いた。辺野古吉は40年運用、200年耐用するものと米軍は要求しているという。

沖縄の基地と歴史とその背景を良く知らなければならない。

辺野古に於いても東村高江の座り込みテントに於いても昼夜別なく守っている地元住民の方が極めて温厚な感じでありながら強靱な意志を感じた。政府の都合のいい言い回しと本土マスコミ評に騙されないようにしましょうね、というお話に大変強い感銘を受けました。

時間が許せば高江の丘の上やテント泊まり込みの機会があればいい共同行動にもなるのではないかと思う。人数を増やしてアピールするのは大きいと思う。テント村での話しを聞いたりする機会が殆どなかったのが残念でした。

私たちがただ頑張っただけではすまない。

沖縄で何が起きているのか、常に関心を持って考え政治をよりいい方向に動かす人を選んでゆかないといけないと思う。

お話や説明を聞くなかで沖縄の苦難や不幸な状態を経験し現在もその中で苦しんでいる人たちに共通していたのは、自分と同じ様な苦難や不幸を押し付けてはならないというのが人の考えである。普天間が辺野古に行ってもよくない、本土に行ってもよくない、本土に行っても良くない、世界一危険なものではなくすべきである。だから沖縄の人に聞くのではなく自分自身の問題として考えて行動することであると結んでいる。そのことが大変印象に残った。

沖縄との関わりを深め平和の為に自分がライフワークとしてやっている染織や藍染の世界を通じて出来ることを頑張りたい。

難しいかも知れないがテント村だけのコースもあればいいと思う。